

鳥インフルエンザに対する地域住民と養鶏農家のリスク認知の違い

サトウ ユカ
佐藤 祐佳*

目的 本研究では、地域住民・養鶏農家の鳥インフルエンザに対するリスク認知を明らかにすることを目的とした。

方法 無記名自記式質問紙調査で、地域住民310/1,000人（回収率31.0%）と養鶏農家198/976人（回収率20.3%）に実施した。主な調査項目は、感染症についての認知とリスクイメージである。リスクイメージは、恐ろしさ因子（4項目、各項目1点から7点と配点）と未知性因子（4項目）の平均得点を恐ろしさ因子得点、未知性因子得点として算出した。

結果 感染症の認知では、SARS（OR=0.49 $P=.003$ ）で地域住民は養鶏農家に比べ有意に認知が低かった。感染症のリスクイメージにおいて有意差を認めた変数は、鳥インフルエンザの恐ろしさ因子（ $\beta=-0.89$ $P<.001$ ）、未知性因子（ $\beta=0.74$ $P<.001$ ）であった。地域住民は鳥インフルエンザに対して、養鶏農家に比べて恐ろしさのイメージが低く、未知性のイメージは高かった。また養鶏農家は、未知性のイメージは低いものの、恐ろしさのイメージが高かった。

結論 地域住民と養鶏農家の鳥インフルエンザのリスク認知の違いが明らかになった。

Key words : 鳥インフルエンザ, リスク認知, リスクイメージ, 感染予防教育

日本公衆衛生雑誌 2015; 62(3): 117-124. doi:10.11236/jph.62.3_117

I はじめに

鳥インフルエンザ（H5N1）は、感染力が強く、ヒトが感染した場合では死亡率54%と致死率も高く、治療法が確立していないことから驚異的な感染症である^{1,2}。わが国では、2004年には山口県、大分県、京都府で発生し、2007年には宮崎県、岡山県で発生³し、発生農家だけではなく、養鶏産業全体においても多大な経済的・精神的な被害が生じ、近隣住民も巻き込み社会的な混乱を招いた。さらに、2009年4月に発生した2009新型インフルエンザ（N1H1）では、世界中で多くの死者をだし、未知のウイルスに対する脅威と心理的不安を人々に与え、社会不安を招いた^{4,5}。このような、感染症の発生時の状況を踏まえると、未知の感染症に対する備えを持つことが極めて重要なことである。これに対し、厚生労働省は2008年に鳥インフルエンザ（H5N1）を二類感染症に指定し、入院措置等の法的根拠を整備するとともに、新型インフルエンザを感染症法に位置づけ発生直後から対策を実施できるようにしている。

こうした目に見えない感染症に対する社会的な混乱を避けるためには、一方で地域住民への啓発活動といったリスクマネジメントが重要であり^{2,6,7}、とくに感染症の集団発生においては、個々の感染防御が基盤であり、1人1人の感染症に対する知識・技術の修得が重要である。

鳥インフルエンザ（H5N1）は、東南アジアを中心に感染が確認され、ヒトではアジア、中東、アフリカを中心として感染が報告されている。日本においても、鳥インフルエンザの発生は鳥類のみであるが、感染の拡大を最小限に抑え、更なる二次感染、新たな感染症の発生を防ぐためには、養鶏農家だけでなく、地域住民も同様に鳥インフルエンザ（H5N1）理解し、適切な対処行動がとれることが望ましいと考える。とくに鳥インフルエンザ（H5N1）は、トリ-トリ感染の発生により、1羽でも認められた場合養鶏農家にとっては莫大な被害となる。その一方で、トリ-ヒト感染、あるいはヒト-ヒト感染を危惧する地域住民への影響も大きい。また、感染症の予防行動には、感染症についての知識や認識が大きく影響を及ぼすと考える。

そこで、本研究は地域住民・養鶏農家の鳥インフルエンザに対するリスク認知を明らかにすることを目的とした。

* 久留米大学医学部看護学科
責任著者連絡先: 〒830-0003 福岡県久留米市東櫛原町777-1
久留米大学医学部看護学科 佐藤祐佳

II 研究方法

1. 調査対象者

1) 地域住民について

A町は九州圏内に位置し、人口約15,000人であり、自然豊かな町である。第1次産業は16.0%を占めており、養鶏場は1軒である。A町の協力を得てA町の承認が得られた20歳～60歳の住民を対象とし、住民基本台帳からの対象者の抽出を行った。対象者の抽出は、層化2段階無作為抽出(性・年齢)により1,000人を抽出した。対象者の抽出、郵送に関しては、個人情報保護のためA町が実施した。

2) 養鶏農家について

NTT九州電話帳に養鶏と記載されているすべての養鶏場の事業主976人を対象とした。

2. 調査方法

調査は、対象者に無記名自記式質問紙を郵送し、対象者が回答後、返信用封筒を対象者自身が投函を行い回収した。

3. 調査内容

1) 基本的属性：年齢・性別など

2) 鳥インフルエンザに対する取り組み：対策の認知状況など

3) 感染症についての認知：新型インフルエンザ、SARS、HIV、結核、鳥インフルエンザの5つの感染症に対する主観的認知で「聞いたことがない」、「聞いたことがある程度」、「なんとなく知っている」、「知っている」で回答を求め配点をそれぞれ1～4点とし、得点が高いほど認知が高いとした。

4) リスクイメージ：季節性インフルエンザ、SARS、HIV、結核、鳥インフルエンザ5疾患に関して、三橋らのリスクイメージ尺度^{8,9)}を使用した。リスクイメージ尺度は、恐ろしさ因子、未知性因子の2つの下位項目からなり、恐ろしさ因子は脅威度(ふつう-恐ろしい)、致命度(致命的でない-致命的である)、将来的影響(将来まで影響が残らない-将来まで影響が残る)、世界的影響(世界的な影響がない-世界的な影響がある)の4項目であり、未知性因子は科学的未知(科学的に分かっている-科学的に分かっていない)、認知度(危険を正確に知らない-危険を正確に知っている)、観測可能性(観察することが可能-観察することが不可能)、接触性未知(接触している人が知らない-接触している人が知っている)の4項目で構成される。各項目の得点は7段階尺度(1点から7点と配点)とし、恐ろしさ因子(4項目)と未知性因子(4項目)の平均得点を恐ろしさ因子得点、未知性因子得点として算出した。

5) 鳥インフルエンザ発生時の対応：鳥インフルエンザの発生経験の有無、鳥インフルエンザの発生の原因などは五肢択一にて回答を得た。

4. 調査時期

地域住民：2010年12月中旬～2011年1月下旬

養鶏農家：2011年1月上旬～2011年2月下旬

5. 分析方法

各質問項目について、地域住民・養鶏農家の2群間比較を行った。5つの感染症の認知を従属変数とし、独立変数を地域住民、養鶏農家とし性・年齢を調整してロジスティック回帰分析を行った。ここで用いた従属変数の感染症の認知は、「聞いたことがない」、「聞いたことがある程度」を『認知なし』とし「なんとなく知っている」、「知っている」を『認知あり』とした。また、リスクイメージについては、各感染症に対するリスクイメージの恐ろしさ因子得点と未知性因子得点を従属変数とし、独立変数を地域住民、養鶏農家とし性・年齢を調整して重回帰分析を行った。統計にはSPSS statistic19を用い、有意水準は $P<.05$ とした。

6. 倫理的配慮

研究の実施は、久留米大学医療に関する倫理委員会の承認(2010年10月22日研究番号10196)を受けて実施した。質問紙調査では、調査目的・方法・内容を文書にて説明を行い、質問紙への回答の返信をもって、調査への同意が得られたこととした。また拒否する権利や同意は自由意志であることを文書で説明し了解を得た。調査内容・結果について、対象者から問い合わせがあった場合には説明を行うことを文書にて説明を行った。調査結果は研究以外の目的には使用しないことを説明した。また質問紙は研究終了後、速やかに破棄することを説明した。

III 研究結果

回収率は、地域住民312/1,000人(31.2%)・養鶏農家201/976人(20.6%)であった。このうち性別に欠損がない地域住民310/1,000人(31.0%)・養鶏農家198/976人(20.3%)を有効回答とし、分析対象とした。

1. 基本属性

対象者の年齢は、地域住民 42.5 ± 11.6 歳であり、養鶏農家 56.0 ± 14.1 歳であり地域住民に比べて年齢が高かった($P<.001$)。また年齢区分では、地域住民41歳～60歳177人(57.1%)、養鶏農家41歳～60歳97人(49.0%)が最も多く、地域住民と養鶏農家の年齢区分に有意な差を認めた($P<.001$)。性別は、地域住民 男性149人(48.1%) 女性161人(51.9%)であり、養鶏農家 男性183人(92.4%) 女性15人

(7.6%)であり養鶏農家に有意に男性が多かった ($P<.001$) (表1)。

2. 鳥インフルエンザに対する取り組みの実施と認知

行政における鳥インフルエンザ発生防止対策について、地域住民は「よく知っている・知っている」が125人 (40.3%), 「あまり知らない・知らない」が184人 (59.4%)であった。これに対し養鶏農家では「よく知っている・知っている」187人 (94.5%), 「あまり知らない・知らない」10人 (5.1%)であった。

また、鳥インフルエンザの発生予防対策の具体的な指針である鳥インフルエンザ発生予防対策の認知については、地域住民はすべての項目で養鶏農家よりも有意に低かった ($P<.001$)。また発生予防対策では、飲料水等の汚染による侵入防止100人 (32.8%), 従業員の教育89人 (29.0%)であった (図1)。

行政の取り組みの拠点である家畜保健衛生所について、地域住民で「知っている」と回答したものは35人 (11.3%)であった。

3. 感染症の認知

5つの感染症の認知の平均得点を表1に示す。また、5つの感染症の認知について、ロジスティック回帰モデルを使用して、養鶏農家に対する地域住民のオッズ比および95%信頼区間を算出した (表2)。

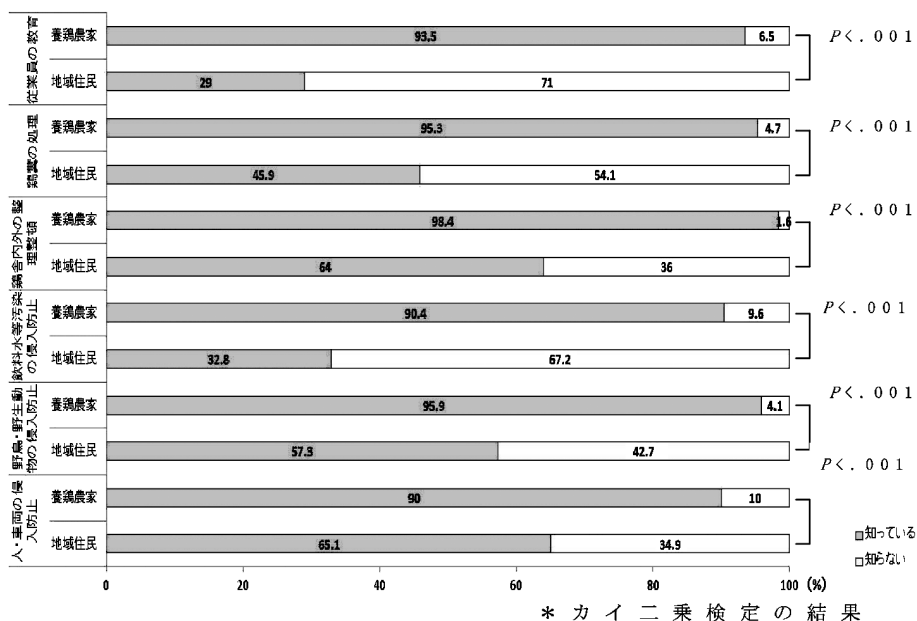
感染症の知識に有意な差を認めた感染症は、SARSでありオッズ比0.49 (95%信頼区間0.31-0.78 $P=.003$)と地域住民が養鶏農家に比べ低かった。

また有意な差は認められないが、鳥インフルエンザもオッズ比0.47 (95%信頼区間0.22-1.01 $P=.054$)と地域住民が養鶏農家に比べ低かった。

表1 基本属性

		地域住民 n=310 人 (%)	養鶏農家 n=198 人 (%)	χ^2 test P値
年齢区分	21~40歳	133(42.9)	20(10.1)	<.001
	41~60歳	177(57.1)	97(49.0)	
	60~80歳	—	75(37.9)	
	80歳以上	—	3(1.5)	
	無回答	0(0.0)	3(1.5)	
性別	男性	149(48.1)	183(92.4)	<.001
	女性	161(51.9)	15(7.6)	
感染症の認知		地域住民 平均 (SD)	養鶏農家 平均 (SD)	
新型インフル		3.49(0.73)	3.57(0.72)	
SARS		2.70(1.09)	2.96(1.00)	
HIV		3.67(0.61)	3.57(0.74)	
結核		3.52(0.69)	3.57(0.69)	
鳥インフル		3.35(0.74)	3.78(0.63)	
感染症のリスクイメージ		平均 (SD)	平均 (SD)	
季節インフル	恐ろしさ因子	3.98(1.05)	3.85(1.34)	
	未知性因子	4.10(1.12)	3.95(1.08)	
SARS	恐ろしさ因子	5.13(1.10)	5.02(1.17)	
	未知性因子	4.66(1.06)	4.58(1.15)	
HIV	恐ろしさ因子	5.88(1.10)	5.66(1.17)	
	未知性因子	3.77(1.18)	3.86(1.20)	
結核	恐ろしさ因子	4.40(1.26)	4.27(1.20)	
	未知性因子	3.84(1.10)	3.78(1.14)	
鳥インフル	恐ろしさ因子	4.91(1.12)	5.73(1.18)	
	未知性因子	4.43(1.01)	3.49(1.33)	

図1 鳥インフルエンザ発生予防対策の地域住民と養鶏農家の認知



4. 感染症のリスクイメージ (リスク認知)

感染症のリスクイメージの各因子の平均得点を表1に示す。また、感染症のリスクイメージについて、重回帰分析の結果を表3に示す。感染症のリスクイメージに有意差が得られた変数は、鳥インフルエンザの恐ろしさ因子 ($\beta = -0.89 P < .001$) と未知性因子 ($\beta = 0.74 P < .001$) であった。つまり、鳥インフルエンザについては、地域住民は養鶏農家に比べて恐ろしさのイメージが低く、未知性のイメージが高かった。

地域住民、養鶏農家ごと各疾患に対する2種類の因子の得点を算出した。恐ろしさ因子をx軸、未知性因子をy軸とし、各因子のとりえる値の中間である4を境界として4つの象限にわけ、地域住民、養鶏農家の別に各疾患の得点を図示した(図2)。リスク認知は、右に位置するほど恐ろしいイメージであり、上に位置するほど未知性の高いイメージであ

表2 養鶏農家に対する地域住民の感染症についての認知

	OR	95%信頼区間	P値
新型インフルエンザ	0.54	0.26-1.11	0.092
SARS	0.49	0.31-0.78	0.003
HIV	1.38	0.59-3.21	0.454
結核	1.10	0.50-2.43	0.806
鳥インフルエンザ	0.47	0.22-1.01	0.054

*年齢・性別で調整したロジスティック回帰分析結果

ることを示す。鳥インフルエンザは、地域住民は第1象限(4.91, 4.43)、養鶏農家は第4象限(5.73, 3.49)であった。季節インフルエンザは、地域住民は第1象限(3.98, 4.10)、養鶏農家は第4象限(3.85, 3.95)であった。他の感染症は、地域住民・養鶏農家ともに同象限に分類された。

5. 鳥インフルエンザの発生時の状況・対応

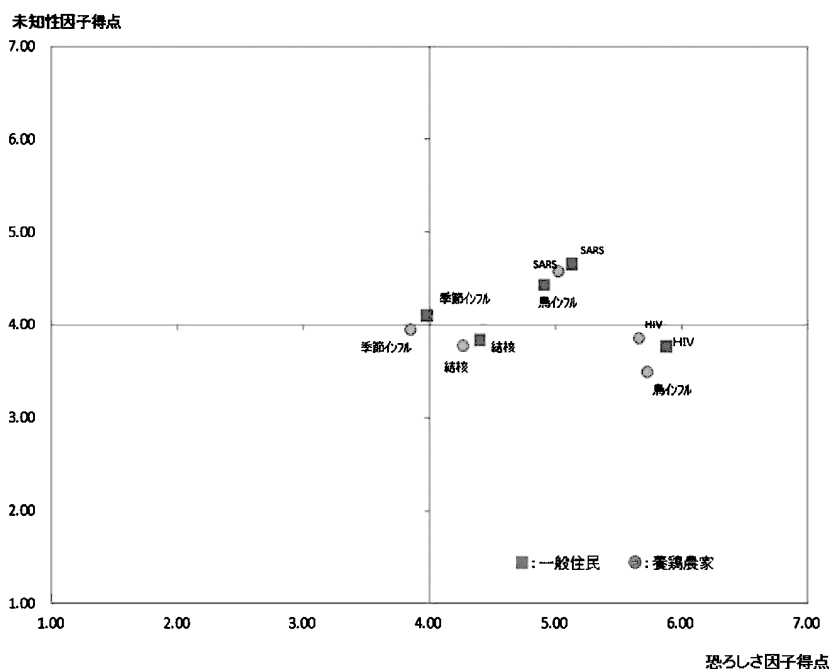
鳥インフルエンザが身近で発生したことがあると回答したものは、地域住民5人(1.6%)、養鶏農家56人(29.0%)であった。身近で発生した際の被害について、地域住民は「経済的損失」2人(0.7%)、「心理的負担」2人(0.7%)、養鶏農家は「経済的

表3 養鶏農家に対する地域住民の感染症のリスクイメージ

		β	95%信頼区間	P値
季節性インフルエンザ	恐ろしさ因子	0.07	-0.19-0.33	0.601
	未知性因子	0.17	-0.86-0.43	0.193
SARS	恐ろしさ因子	-0.03	-0.29-0.23	0.821
	未知性因子	0.17	-0.08-0.43	0.179
HIV	恐ろしさ因子	0.05	-0.20-0.31	0.677
	未知性因子	0.09	-0.18-0.36	0.534
結核	恐ろしさ因子	-0.09	-0.37-0.18	0.505
	未知性因子	-0.09	-0.34-0.17	0.498
鳥インフルエンザ	恐ろしさ因子	-0.89	-1.15--0.63	<0.000
	未知性因子	0.74	0.49-1.00	<0.000

*年齢・性別で調整した重回帰分析結果

図2 地域住民と養鶏農家の感染症に対するリスクイメージ



損失」29人(16.7%)「心理的負担」26人(14.9%)と回答した。

感染症発生時行政(国)に望むことについて、地域住民は「生活の方法に関する知識の提供・支援」37.4%(116人)、養鶏農家は「原因の究明」27.2%(54人)が最も多かった(図3)。また、鳥インフルエンザの発生の原因として影響が強いと思うことについて、地域住民は「施設の危機管理能力の低下」

31.0%(96人)、養鶏農家は「施設の危機管理能力の低下」21.2%(42人)が多かった(図4)。

鳥インフルエンザの発生の対策として最も最優先されるべきものについて、地域住民は「病院・保健所などの医療機関の対応」33.9%(105人)、養鶏農家は「感染症が発生した施設側の適切な対応」23.8%(47人)が多かった(図5)。

図3 地域住民と養鶏農家が鳥インフルエンザ発生時の対応として望むこと

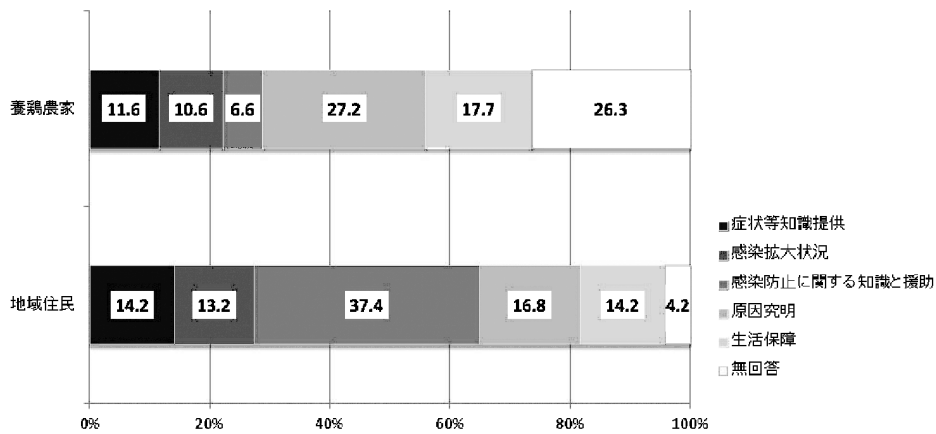


図4 地域住民と養鶏農家が鳥インフルエンザの発生原因として思うこと

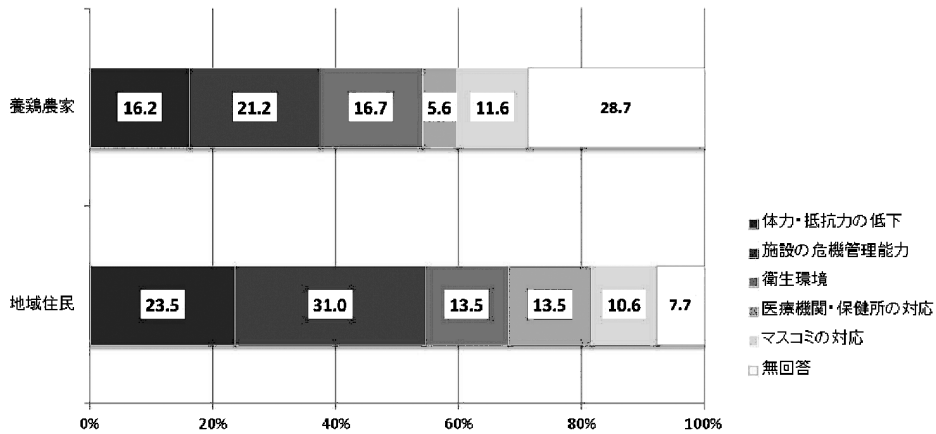
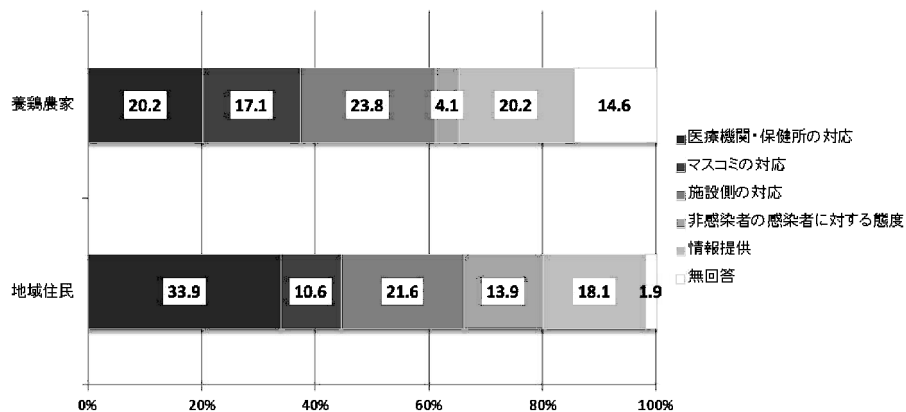


図5 地域住民と養鶏農家が鳥インフルエンザの発生対策で優先されるべき対策と思うこと



Ⅳ 考 察

本調査により地域住民と養鶏農家の鳥インフルエンザについてのリスク認知の違いが明らかになった。

鳥インフルエンザ知識については、地域住民と養鶏農家に違いは認めなかった。地域住民と比べ養鶏農家では、これまでの国内での発生にともない鳥インフルエンザ (H5N1) 発生予防対策が取り組まれており、近年では鳥インフルエンザ (H5N1) の発生を想定した訓練も行われている¹⁰⁾ことから知識が高いと考える。また鳥インフルエンザ発生時 (H5N1) には、マスメディアを通じて多くの情報提供が地域住民に対しても行われていることから知識の普及につながったのではないかと考える。しかし、鳥インフルエンザ (H5N1) 発生予防対策については、地域住民の認知は低く、感染予防行動を実施するまでの知識の習得には至っていないのではないかと推測する。

リスク認知では有意差を認めた感染症は、鳥インフルエンザであり恐ろしさ因子 ($\beta = -0.89 P < .001$)、未知性因子 ($\beta = 0.74 P < .001$) であった。このことから、鳥インフルエンザに対して、地域住民は養鶏農家に比べて、鳥インフルエンザに対して恐れが低く、未知性因子が高いことから、鳥インフルエンザの知識が不足していること、鳥インフルエンザの発生が身近で経験した地域住民は、1.6%と低かったことから、身近なものではない感染症に対して恐れを感じていないのではないかと推測する。一方で養鶏農家は、地域住民に比べ恐ろしさ因子が高く、未知性因子が低いことから、鳥インフルエンザ (H5N1) についての発生予防対策を実施していることから専門的な知識を有していることが未知性因子を低くしているのではないかと考える。このことは、鳥インフルエンザ (H5N1) の発生予防対策の認知状況からも言えることである。しかし、鳥インフルエンザ (H5N1) 発生予防措置を実施しているが、日本国内で鳥インフルエンザ (H5N1) が発生している現状や、本研究結果においても発生時の被害について、養鶏農家は経済的な負担や心理的負担を挙げていることから、発生時の現状等も考慮し、恐れとして認知しているのではないかと考える。そのため、専門的な知識を有しているにもかかわらず、鳥インフルエンザに対する恐れが高くなっていると考えられる。

また、今回感染症に対する認知の現状を捉えるためにリスク認知図の作成を行った。リスク認知図は、対象者の属性からリスク認知状態の予測や感染症の致死率や感染力などの実際の医学的リスクとの

ズレを明らかにする^{8,9,11)}ことが報告されている。また、リスク認知図では、リスク認知の安定への方向は第4象限の方向である¹¹⁾と報告がなされており、今回の結果から、鳥インフルエンザのリスク認知では、養鶏農家に対しては感染症の発生を未然に防ぎ、二次感染を防ぐためにも、鳥インフルエンザ発生時の経済的損失といった実質的な内容を考慮した上で、恐ろしさ因子を低下させるための情報提供や対策・措置、地域住民に対しては、未知性因子を低下させるための鳥インフルエンザに対する正しい理解を得るための情報提供を行うことが必要であると考えられる。また、地域住民が行政へ望むことでは、生活の方法に関する知識の提供・支援が挙げられており、感染症が発生している状況の中で、どのように感染症から身を守っていくためにどのように対処すべきなのかを明確に示し適切な行動へ導いていくことが求められている。これらの情報提供により知識を深め、予防対策を知ることによって過剰な恐れを抱くことなく適切な予防行動がとれると考える。このように、感染症に対する認知を明らかにすることにより、対象となる個・集団が感染症をどのように受け止め、認識しているかを把握することにつながり、これからの感染症予防対策の方向性を検討する上でも有益であると考えられる。

今回の調査では、鳥インフルエンザを、強毒性 (H5N1) であるか否かを区別しておらず、地域住民、養鶏農家が、鳥インフルエンザの設問に対して、鳥インフルエンザ (H5N1) として認知したのか、鳥インフルエンザ (H5N1) 以外と認知したのかは明らかにできない。しかし、現段階では鳥インフルエンザから受ける印象が、地域住民と養鶏農家で異なることは明らかであり、これらの認知の違いが、地域住民の鳥インフルエンザ (H5N1) 発生時に対する誤ったイメージをもたらす、社会的混乱を招くことにつながるのではないかと推測する。

また地域住民、および養鶏農家の年齢・性別が異なっており世代間のリスク認知については言及することはできない。養鶏農家において全体的には年齢層が高く、男性が多く占めていたが、2003年農業構造動態調査によると、養鶏業従事者の年齢階層は、65歳以上が29.1%を占め、39歳以下は11.6%であり、今回の対象者は現養鶏農家の年齢階層を反映する者であると考えられる。また、男性が多くを占めたことについては、対象者の選定にあたり、電話帳に登録された養鶏農家としたため、養鶏農家の事業主にあたる対象者が回答をしているために、多くなっていると推測する。しかし、今回の対象は養鶏業を営む専門家として鳥インフルエンザ (H5N1) 発生予防

対策の主な担い手であり、より身近である鳥インフルエンザの認識を把握することは妥当であると考えられる。地域住民についても生産年齢層を捉えており、社会・経済を担う年齢層にあることからこれらの年齢層がどのように鳥インフルエンザについて捉えているのかは重要な事であると考えられる。感染症についての意識については、社会的背景などが影響を及ぼすと考えられるため今後は世代間や性別による認識の違いにも配慮し、さらに検討を行っていくことが必要であると考えられる。

本研究の限界として、分析にあたっては対象者の年齢・性別の調整を行い実施したが、回収率が低いことから母集団を正確に反映するものではなく、偏りは不可避であると考えられる。今回の結果は、感染症に対して関心がある高い対象者が回答をしている可能性が高く、一般的な集団よりも感染症のリスクを低く捉えているのではないかと推測される。また、養鶏農家は任意掲載である電話帳より対象者から抽出していることから、今回の調査結果は限られた集団の結果であることから一般化することは限界があると考えられる。しかし、これまで十分に把握されていなかった鳥インフルエンザに対するリスクイメージを明らかにしようとした本研究は、感染症拡大を防ぐためにリスクイメージを改善する教育的介入の可能性を示した点で公衆衛生的意義を有すると考える。

本研究にあたりご協力を頂きました対象者の皆様、また本研究遂行にあたりご指導を頂きました久留米大学医学部看護学科教授三橋睦子先生、久留米大学医学部環境医学講座教授石竹達也先生に感謝いたします。

なお、本研究は平成22年度文科省科学研究費補助金(若手研究(B)課題番号 22792164)の助成を受けて実施したものである。

(受付 2014. 7. 3)
(採用 2015. 1. 7)

文 献

- 1) 押谷 仁. 検証「SARS」世界の状況とWHOの対応. 公衆衛生 2003; 67(11): 820-825.
- 2) 玉記雷太, 神垣太郎, 押谷 仁. わが国における新型インフルエンザの流行. インフルエンザ 2009; 10(1): 33-37.
- 3) 瀧口俊一. 新型インフルエンザ: その対策 宮崎県での高病原性鳥インフルエンザへの対応. 成人病と生活習慣病 2008; 38(11): 1261-1267.
- 4) 阿部信次郎, 藤井達也, 箱崎幸也. 新型インフルエンザ: その対策 新型インフルエンザ対策におけるリスクコミュニケーション. 成人病と生活習慣病 2008; 38(11): 1268-1273.
- 5) 勝田吉彰. 大規模感染症流行が及ぼす心理的影響と対策: SARSの経験から新型インフルエンザパンデミックへ. 臨床精神医学 2006; 35(12): 1719-1722.
- 6) 山口佳寿博, 坪水敏夫, 秋本 一, 他. 流行を食い止める: 新型インフルエンザ 新型インフルエンザ対策: 地域医療にできること. Mebio 2008; 25(11): 56-67.
- 7) 丸山英二. 冬の熱, 冬の咳, 冬の下痢: 冬季警戒の市中感染症 呼吸器系 新型インフルエンザ流行時の社会的対応策. 感染と抗菌薬 2007; 10(4): 347-354.
- 8) 三橋睦子, 大坪靖直. 医療従事者の感染防護具着用が人に与える印象と事前情報との関連性. 日本災害看護学会誌 2007; 9(2): 2-14.
- 9) 三橋睦子. 感染症リスク認知地図の試作と有用情報抽出の可能性: 「リスクイメージ」と「リスク認知への影響因子」に関する情報抽出. 日本看護科学会誌 2004; 24(3): 60-71.
- 10) 村上弘子, 佐野恭一. 地域でのHAPIの取り組み市町村に対するHAPI防疫体制構築への取り組み: 福岡編. 養鶏の友 2009; 7: 20-23.
- 11) 三橋睦子, 辛 銀娟, 大坪靖直, 他. SARS集団発生の経験をとおした感染症の知識とリスク認知との関連性. 久留米医学会雑誌 2007; 70(3-4): 78-86.

Differences in the recognition of avian influenza risk between poultry farmers and the general population

Yuka SATO*

Key words : avian influenza, risk, risk image, infection prevention education

Objectives In this study, we aimed to compare the risk-recognition of avian influenza between poultry farmers and the general population

Methods To obtain health-related data, including the participants' awareness of avian influenza, their recognition of potential infection, and their risk image, or their level of fear and understanding an anonymous self-reported questionnaire was administered. We measured the risk image on a 7-point scale, with 1 representing the lowest and 7 representing the highest risk image. Using their responses from 8 questions (4 per factor), We then calculated and averaged the scores to obtain the fear factor and unknown factor scores.

Results This questionnaire was completed by 310 of 1,000 (31.0%) members of the general population and 198 of 976 (20.3%) poultry farmers. The two groups differed significantly in terms of their overall awareness and understanding of severe acute respiratory syndrome (odds ratio=0.49 $P = .003$), with the general population scoring significantly lower than the poultry farmers. The risk image scores showed significant differences in fear factor ($\beta = -0.89$, $P < .001$) and unknown factor ($\beta = 0.74$, $P < .001$), with the risk image for the fear factor being lower and that of the unknown factor being higher in the general population when compared with the poultry farmers.

Conclusion We found there to be a definite gap in the recognition of avian influenza between the two subject groups.

* Kurume University School of Nursing